



ご近所サイト「ネーベンアン」で 交流と助け合い

ドイツではコロナ禍のためバザー やフリーマーケットもなく、小売店やデパートで買い物するにはコロナ検査の陰性結果を提示する必要がある。他人と会うのは一人だけに限定され、友達づきあいもままならない。

そんな中、オンラインの交流サイトが好評である。地区ごとにグループをつくり、物のやり取りや情報交換、助け合いをしようというので、ドイツ全国に広まっている。

私の住むハノーファー市リンデン地区でも、5年前にサイト「ネーベンアン（隣に）」が発足した。現在約1200人が登録し、書き込みが見られる隣接区も入れると3200人が参加している。誰でも情報を書き込んだり、コメントできる。例えば次のような書き込みが。

- ・子供用の自転車売ります
- ・食器を包むため、古新聞をください
- ・ローズマリー（ハーブ）あげます
- ・ズームで読書会するから興味のある人は？
- ・パソコンの電源ケーブルを一晩だけ貸して
- ・娘にピアノを教えてほしい
- ・失業手当支給についての新しい情報が出てるよ

- ・うちの前に、あげたいもの置いてるから持つていってね
- ・蜂を救うために、花の種を無料で配布しているグループがあるよ
- ・赤ちゃんがいるんだけど、いつも一人で散歩していて寂しい。赤ちゃんがいる人、一緒に散歩しませんか
- ・ビーチバレークラブのメンバー募集

いろんなものが売ったり借りたりされているが、傷があつたり、擦り切れている箇所は写真付きで注意書きが添えられている。ご近所だからかえって変なものは提供できないのがわかる。輸送のコストやエネルギーがかからず、エコである。

同じ地区の人の名簿（氏名とも）が写真付きで掲載され、個人宛てにメールを送ることもできる。隣の地区の人は、下の名前はわかるが、姓はイニシャルのみにして、匿名性に配慮している。

サイトには「黄金の三原則は、親切、正直、助け合い。隣人のためになるとしたら、どんどんお節介しましょう」と書いてある。通常の友人つきあいと同じ原則である。

サイト運営組織は「コロナ禍により社会的な結びつきが試され、連帯と助け合いの精神が生まれた」としている。

2020年の特徴として「つながりと連帯」をあげ、買い物の手伝いやベビーシッター、オンラインでの催し、ベランダのコンサートなど、同サイトを通じて様々な輪が広がった。また「健康と福祉」も大事な要素で、ネットワークがあることで孤独と孤立を避けられ、新加入者の17%が孤独を感じていたが、以前からのメンバーは12%と低かったという。

メンバーに興味のある分野を尋ねたところ「持続可能性、気候保護と環境」が64%でトップであり、ごみ拾いや街路樹の水やり、食品のシェアなど具体的な活動があった。近所のお店に寄付をしたり、商品券を購入する形でサポートするなど「地元経済を支援」の活動も見られた。ただの情報交換や交流の場となっているだけでなく、地域とつながり社会貢献の場になっていることがわかる。現在は参加無料だが、サイト運営に寄付が求められている。

エコやスローライフが注目を浴びる現在、かえって昔ながらの近所づきあいが見直されており、それがオンラインという形で広がっている。現実に会うのを代替しており、新たな可能性を感じる。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

コロナ規制が緩和され、中2の明は5月10日から5ヶ月ぶりに学校に通い始めました。ク

ラスを半分に分け1日おきに登校。事前にマスクとコロナ簡易検査キットが配布され、週に2回全生徒が登校前に自分で検査し、陰性なら登校できます。

明のクラスは24人なので、半分になると12人。人数が少ない分、先生の目が行き届いているようです。明は「以前は授業の初めに『〇〇先生、おはようございます』みんなで一斉に言ってたのに、今はみんな小声でバラバラ、言い慣れてない感じ」といいます。また「うちのグループはおとなしい子が多くて、授業中私語がない。隣と2メートル離れているから気が散らない。以前より授業がはかどる」



簡易検査キット使用中

と満足そう。普通の授業ではマスクはつけっぱなしですが、体育ではなし。授業でドッジボールをしたとき、みな気をつけてあまり近づかないようにしていました

学校によっては登校が一週間交代のところもありますが、フランス語や数学など難しい教科では自宅学習が続くより、2

回に1度は授業を受けられる1日おきの方がいいと明はいいます。

初日は学校から帰り「いつも違ったけど、なんかいいと思ったよ。昔、普通に学校に行けたのが嘘みたい」としみじみ。学校は子どもにとって、いろんな意味で必要なのだと改めて思いました。



ロックダウンで、床屋も3ヶ月閉まっていた。明は半年ぶりに散髪屋へ。